



絵馬／青森県（碧祥寺博物館蔵）

本州北部の狩猟社会と信仰

恵みをもたらす山は、恐れ敬うべき信仰の山でもあります。山の神の支配する異界とし、動物たちもその支配下にあると信ずるマタギは、不浄であることを極端に嫌う山の神の機嫌を損ねないように十分に注意します。また、山に入ってから山言葉を使用し、また不要な言動を慎むなど、日常生活から完全に隔離した行為を下山するまで続けます。獲物を捕らえたときは獲物の毛や内蔵、肉を山の神に献上して感謝し、さらなる恵みと安全を願います。



山の神像／岩手県（碧祥寺博物館蔵）



山の神像／岩手県（碧祥寺博物館蔵）



協力

国立民族学博物館
碧祥寺博物館
資料館ジャッカ・ドフニ
川井村北上山地民俗資料館
市立函館博物館
大槌町教育委員会
佐々木 史郎 氏
田口 洋美 氏

2002年7月19日[金]－9月26日[木]

開館時間 9:30－16:30
休館日 月曜日（ただし9/16, 23は開館）、9/17（火）、9/24（火）
観覧料 一般300円（240円）／高校生・大学生100円（80円）／
小学生・中学生50円（30円）
（ ）内は10名以上の団体料金

写真：漆喰／北海道アイヌ（国立民族学博物館蔵）

第17回特別展

狩る



北の地に獣を追え

 北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1（天都山・道立オホーツク公園内）
TEL 0152-45-3888 FAX 0152-45-3889
HomePage <http://www.ohotoku26.or.jp/hoppohm/>

写真：仕掛け弓／エベン（国立民族学博物館蔵）

狩猟は漁撈や採集とともに人類の最も基本的な生業のひとつであり、今日でも世界各地で行われています。なかでも亜寒帯南縁から温帯北部に広がる森林地帯で営まれてきた狩猟は、北方における森林資源利用の典型的なあり方を示しています。

本特別展ではこうしたアムール中流域から本州北部にいたる地域の狩猟文化をつうじて森林の資源利用を紹介します。

北方諸民族の狩猟

アムール流域からサハリン、北海道にかけての地域に暮らしてきたさまざまな民族集団は、狩猟や漁撈、採集をつうじて森のめぐみを利用してきました。なかでも、狩猟は自家用の肉や毛皮を獲得する重要な手段でしたが、中国の需要を背景に交易を目的とするクロテンやカワウソなどの毛皮獣狩猟も活発で、元・明代にはすでに中国の毛皮交易ネットワークが構築されました。また、清代にはアムール流域、沿海地方、サハリン、さらに北海道を含む広大な地域が毛皮生産地として中国交易とのつながりをもっていました。

クロテン用ワナ(模型)/ウイльта
(国立民族学博物館蔵)



クロテン用ワナ/北海道アイヌ
(国立民族学博物館蔵)



木製クマ像/ナーナイ (当館)



木製トラ像/ナーナイ (当館)

精神世界

狩猟、漁撈、採集を中心とした生業は農耕のように一定の土地を管理し、定期的な収穫を期待できるものではなく、常に不安定な要素を含んでいます。そのため、人びとは自然や動物・植物に対して感謝するという観念を共有していました。クマをはじめとする各種「送り儀礼」が行われ、また動物の体の一部を常時携帯したり、動物をかたどった木偶を作ることによって動物から力をもらい、さまざまな悪霊から身を守ることができるとされてきました。



山立根本之巻/岩手県 (碧祥寺博物館蔵)



火縄銃/岩手県 (碧祥寺博物館蔵)

本州北部の狩猟

本州北部で森林資源を利用してきた狩猟者といえばマタギが有名です。この名称が一般によく知られるようになるのは戦後のことです。語源には諸説があって明らかではありませんが、山間部に生活し、伝統的な狩猟技術を受け継ぎ、専業あるいは兼業の狩猟者集団もしくは個人の狩猟者をさしています。地域によっては鉄砲打ち、山立(ヤマダチ)と呼ばれることもあります。

鉄砲の普及や農地の開拓に伴う鳥獣害の多発、鳥獣の肉や毛皮、あるいは薬としての鹿角・熊胆などを換金交易できるだけの市場の整備などの条件が整った近世期に、狩猟の専門集団として組織化されてゆきました。

しかし、狩猟は季節的、一時的なもので、狩猟によってのみ暮らしてきた狩猟者は、今も昔も一人もいません。春から夏にかけての農耕、夏から秋にかけての木の実や果実、山菜や薬草の採集と川魚漁、そして冬の狩猟というようにさまざまな生業を組み合わせっていました。



火口入れ/宮城県 (碧祥寺博物館蔵)



火薬入れ/山形県 (碧祥寺博物館蔵)